

梅崎春生：『狂い凧』

「日本多胎支援協会」は、多胎児の出産・育児支援のための団体ですから、当然といえば当然なのですが、今まで取り上げてきた作品は、どれもみな子ども向けに書かれたものでした。しかし、今回はがらりと変わって、大人向けの作品を取り上げます。梅崎春生の『狂い凧』です。「狂い凧」とは、糸が切れてしまって、風に翻弄されあちらこちらへとふらふら流され、翻らされている凧のことで、広い意味での運命や人間関係の中で揺れ動かざるを得ない人間を、そしてその不安感と寄る辺なさを見事に言い表している表現ではありませんか！

物語は、語り手である「私」と友人の二卵性双生児の兄矢木栄介との関わりを中心とした部分（これは「私」の視点で書かれる）と、栄介とその弟である矢木城介との関係を描いた部分（これは「私」の視点ではなく、神が天上から見ているような書き方）を軸に、それに城介の最期を見届けた戦友の加納が主に物語る城介の中国大陆での軍隊生活の描写を加えた構成になっています。「私」の心持ちのこもった部分と、上から見たような客観的表現の物語の部分が、言わば「私」と「他者」の関係をおぼろげに思わせるように、緊張しつつ絡み合っていて、いかにも「ふたごもの」にふさわしい小説構造です。

栄介と城介は、別に特段仲が良いふたごとして描かれているわけではありません。太平洋戦争前期というこの小説の舞台からすれば、こうした仲が普通の兄弟のあり方なのではないかと思われまふ。しかし、今の兄弟姉妹の柔らかい親密さというものは示さなくても、「城介が他のやつと喧嘩をすると、おれが加勢に出るし、おれがやると城介がかけつけて味方になった。仲良く協力して、外的に当たった。ところが家に帰ると、他愛もないことで、おれたちはよく喧嘩をし合ったもんだ。変なものだね」と、ふたごの兄弟らしい関係がきっちり描かれています。僕たちふたごもよく母親に笑われたものです。喧嘩をしていたくせに、親だろうと誰だろうともし誰かが片一方を非難したりすると、突然二人の敵対関係が消え、共同戦線を張って、その新たな「敵」を二人して攻撃するのです。なぜだか、どちらか一方が怒られたり、やられたりすることを二人ともに赦せなかったのでしょうか。これはきっと多くのふたごとその家族が体験することだと思ひます。そういった意味でも『狂い凧』は、ふたごの「特別な感情の交流」をうまく掴んでいるのではないのでしょうか。栄介は、伯父からの援助の学資を自分だけが得ても「喜ぶ気持ちは全然なかった」し、また学資を失った弟を「可哀そうだと思った」わけでもない。彼はそれとは違った感情、「同じ胎内に育って、同じ日に生まれた。何かを分け合った、つまり分身、自分の分身だというような——」感情に包まれていたのです。

このふたごの兄弟には本家筋の伯父がいました。福次郎です。この伯父には跡取りがないために、ふたごにとんでもない提案をします。ふたごのうち成績の優秀な方に大学までの学資金を出すというのです。そして、男の子が生まれたら、その子を本家の跡取りに迎えたいというのです。この提案は、ふたごの仲を直接裂くこともありませんでしたし、このことだけで福次郎がふたごたちに恨まれることは、表面上はありませんでした（この伯父は、その厚かましくて尊大な性格自体が憎まれていたのです）。しかし、この「成績の優秀な方」一人だけに援助を与えるということが、ふたごの運命を次第に変えていきます。すなわち、それを重荷に思ったのか、優秀だったはずの城介は中学校（旧制中学です）で問題を起こし、退学してしまいます。うどんを食い逃げしたというほんのいたずらに毛が生えたような事件なのに、全責任を負って学校を辞めてしまうのです。そして、東京の葬儀社へ

奉公に行きます。こうして、栄介の方が大学まで進むことになります。奉公に行った城介は、やがて召集され、中国大陸内地で衛生兵として軍務に就きます。

召集された城介は、下関で軍隊に入らなくてはなりません。栄介は城介を見送ることにします。別れの晩、二人は町筋の暗い下関でまずパチンコをし、それから居酒屋で別れの杯を重ねます。その時食したのが、また天麩羅うどんなのです。見事なリアリティーと伏線の絡みです。やがて時がたち、城介は宿舎に入らなくてはなりません。実家に持って帰る荷物を預けると、城介は返事をする間も与えずに、顔をそむけ、階段をとんとんと駆け上がってそのまま見えなくなります。栄介は、「ああ」と呻き、「これが見おさめかも知れないな」と切なさがどっこみ上げます。僕が初めてドイツに行ったとき、それは半年程度の滞在だったのですが、ふたごの相棒の真は、丁度この『狂い凧』を読んだ直後だったので、本当に「これが見納めかも知れない」と随分陰鬱な気持ちになったそうです。前の晩、彼の住んでいた寮に泊まり、次の朝空港まで電車で行きました。今ではちょっと考えられないのですが、その時彼は僕のものすごく重い荷物を持ってくれました。僕たちの場合、それは幸いにも「見納め」ではありませんでした。でも、それが二人の行く末の大きな別れ道であったことは確かです。

ふたごたちには、「これが見おさめかも知れないな」と思うような瞬間瞬間があるような気がします。もちろん、そうした瞬間はたいていの場合、「見納め」にはならない普通の別れ、つまり再会のある別れです。でも、僕たちふたごは一種独特な絆のせい、分かれるということに敏感で、ある面では必要以上に別れに意味付けをしてしまう傾向があるのかも知れません。それに、たとえそれが再会のある別れであったとしても、たとえば二人が自立した別々の道を踏み出した後では、再会する僕たちふたごは、実は分かれたときの僕たちとはもう違ってしまっていることも多いのです。ですから、その瞬間瞬間はそういった意味での「見納め」と言えるでしょう。

『狂い凧』は、日本の近・現代文学の中で「ふたご」を扱った最高傑作の一つです。僕は、どの「ふたごもの」が一番好きですかと尋ねられたなら、外国文学ではシェイクスピアの『十二夜』、日本文学では『狂い凧』と答えるでしょう。そして、ただ好きなだけでなく、この二つは文学的な価値も最高だと確信しています。特に、『狂い凧』は大人の男性のふたごとふたごのお父さんにお薦めします。

講談社版「日本現代文学全集 98」『椎名麟三、梅崎春生集』

『梅崎春生全集』第1巻、沖積舎

「新潮現代文学 26」『桜島、幻化』

「日本文学全集 78」『椎名麟三集・梅崎春生集』集英社に収録。

『ツインズ』31号（ビネバル出版）から転載・修正